

## 西域 情報戦の世紀 / カシュガール

「マカートニ（英国外交代表）夫人のカシュガール滞在記」、より  
歴史家 金子 民雄

マカートニ夫婦がカシュガールで過ごした時代は、中央アジアでも大変な激動の時期と重なっていた。西トルキスタンを併合した帝政ロシアは次に東への進出を図り、これを阻止しインドを防御しようとする大英帝国とは、しのぎを削る外交戦を演じていた。その舞台はカシュガリア、即ちシナ新疆省であった。ここは過去、絶え間ない戦乱の巻であり常に回乱（回教徒の反乱）の危機を孕んでいた。多民族と宗教の絡みから、安定を欠き、しかも時の清朝政府の統治機能はほとんど麻痺しきっていた。その中心の都市がカシュガールであった。（同滞在記、訳者まえがき）

### 1. 概要

#### (1) **Kashgar** の地理的位置

新疆ウイグル自治区の西端の都邑 **Kashgar** は、今でこそ鉄道も通じすっかり変貌してしましたが、ここは北に天山山脈、西に世界の屋根パミール、そして南に崑崙とカラコルム山脈が屏風のように聳え、しかも東は果てしないタクラマカンの砂漠が続く、まさしく世界の果てといえる土地である。（同滞在記 P251）

#### (2) **新しいグレート・ゲーム（情報・外交戦）開始の頃の Kashgar**      1890年頃

清の光緒10年（1884年）、ヤクブ・ベクの支配体制が排除され、新疆省が設置された。西欧の地理歴史家たちは専ら東（シナ）トルキスタン、或いはカシュガリアと呼び慣わした。バウワー文書発見（バウワー報告書が1部、現存）。スタインとヘディン。

#### (3) **日清戦争当時の Kashgar**      1894年頃

ロシアの南下政策が急ピッチで進展。アフガンーパキスタン国境の画定。東干の反乱の予見。1901年、英国の作家ラデヤード・キプリングが小説『キム』(Kim) を単行本として出版。

#### (4) **日英同盟の締結（1902年）、そして日露戦争当時の Kashgar**      1904～1905年頃

アジア人が初めて西欧列強を破っていくという昂揚心。カシミールの動き。西本願寺西域調査隊（大谷探検隊）の動き。

#### (5) **新グレート・ゲームは終焉したか！**

- ・ 1907年、英露協商条約の締結 / 1912年、中華民国政府成立 / 1917年、ロシア革命勃発

#### (6) **未踏の山・未知の地域を目指す人達へ**

### 2. 時代の背景（「カシュガール滞在記」マカートニ夫人著、金子民雄訳、「解説」から抜粋して編集）

#### (1) **カシュガリア — 新グレート・ゲームの開始**      1890年

- ・ 1890年11月1日、ヤングハズバンド大尉（27歳）とシナ語の通訳官としてマカ

ートニ（23歳）が **Kashgar** に着任。インド政庁から、変化の激しい東トルキスタン情勢を調査するよう派遣された。

- 清朝を代表するシナ道台（日本の知事に当る。）は、2人のために市郊外にあるチニ・バグ（シナ庭園）と呼ばれる場所にある平屋造りの家屋を提供した。
- 当時のカシュガリアは外見上は一応安定してはいたものの、やはり天山山脈の彼方にあるイリ方面から、何か目に見えない圧力というか威圧といったものを、いつも肌を感じたという。1860～1870年代に吹き荒れたイリの回乱の後遺症である。
- イリ事件後、イリを占拠していたロシアは、1881年清朝との間で条約を締結して撤退していったものの、代わりに **Kashgar** にロシア領事館を設置する権利を認めさせ、以来、隙あらば新疆侵略を虎視眈々と狙っていた。

## （2）陸の孤島カシュガール

1891年～1894年

- 1891年7月、責任者のヤングハズバンドがインドに帰任。
- 1891年の夏に入ると、パミールとフンザ方面の情勢がにわかに険しくなった。ギルギット駐在軍のデュランド大佐麾下の英インド軍がフンザに侵攻し、12月、フンザは英国の手に陥ちた。フンザはパミール方面への重要な進出拠点だった。
- 新疆方面で足踏み状態に陥っていたロシアは、これを打開すべくシベリア方面からさらに沿海州、朝鮮へと食指を動かし始め、シベリア鉄道の完成を急ピッチで進めていた。これに脅威を抱いたのが日本で、ついに朝鮮問題に端を発し、日清戦争が勃発した。
- 1894年8月1日、日清戦争勃発

## （3）新しい人生のスタート

1895年～1902年

- 1895年、マカートニは英国に帰国、カセリーン・ボーランドという女性と婚約。
- 1898年8月、マカートニは英国に帰国、11月、新妻を伴い **Kashgar** に帰任。
- 1900年1月、北京で義和団事件の勃発。これは清朝政府と日本を含む西欧連合軍との戦闘であった。同年8月15日、北京は連合軍の前に陥落し、西太后一派は西安に逃れた。ロシア側の意図した新疆（カシュガリア）併合はできなかったものの、その代り満州を占拠し、ロシア側への編入を図った。
- 1900年3月、ロブ・ノール湖畔で史上名高い楼蘭の廃墟が、スウェーデンの探検家ヘーデンによって発見され、西域の発掘競争が始まった。同年7月、英国のオーレル・スタインが **Kashgar** を訪問、マカートニに逢う。
- 1900年7月以降、**Kashgar** の治安は悪化の一途をたどる。清朝は国家存亡の危機に立ち至った。
- 1902年1月、日英同盟が調印された。同じ1月、ロシアのシベリア鉄道が完成。
- 1902年6月末、マカートニ一家は休暇を取り帰国の途につく。
- 1902年9月、西本願寺の大谷光瑞一行が初めて **Kashgar** に入る。マカートニは不在。

#### (4) 変貌する極東と内陸アジア

1904年～1910年

- ・ 1904年早々、ヤングハズバンド麾下の《チベット使節》がシッキムからチベットに侵攻し、8月、ラサを武力解放してしまった。(チベットにおけるロシアの影響力を排除)
- ・ 1904年2月、日露戦争勃発。
- ・ 1904年4月、マカートニ、英国より **Kashgar** に戻る。
- ・ 1905年を迎えると満州のロシア軍は連戦連敗、5月、バルチック艦隊が全滅、9月、日露講和条約がポーツマスで調印。
- ・ 1907年、英露間による内陸アジア全般における領土保全と、利害関係の調整が図られ、条約が締結された。これを英露協商という。これで一応グレート・ゲームは終息したと言われたが、新興の日本がこれに参加するようになり、現実は一層激しくなった。
- ・ 1908年11月、光緒帝そして西太后没す。

#### (5) カシュガリアの動乱

1911年～1912年

- ・ 1911年10月、辛亥革命勃発
- ・ 1912年 中華民国政府成立、2月、宣統帝が退位して清朝が消滅。
- ・ 1912年 6月、チラ事件発生。
- ・ 1912年10月、英国の女流画家 **E.G.Kemp** がチニ・バグを訪問。

#### (6) 激動の時代

1913年～1915年

- ・ 1913年の新年、マカートニはインド帝国勲爵士 (KCIE) に叙せられ、サー・ジョージ・マカートニとなる。夫人はレディ・カセリーンである。永年の労苦がようやく報われた。
- ・ 1914年7月、第1次世界大戦勃発
- ・ 1915年4月、マカートニ一家、帰国の途につく。夫人が再び **Kashgar** に戻ることはなかった。(戻ることができなかった。) マカートニは更に3年の任期を全うした。
- ・ 1917年、ロシア革命勃発。

### 3. 添付資料 (参考)

#### (1) カシュガールのマカートニ関連文献

金子民雄さんの蔵書の中から、関連文献「25編」をリストアップして表示いただいた。

#### (2) 写真記録

金子民雄さんの蔵書の中にある関連する地図、写真、スケッチなどの一部について、長岡正利さんにより適宜デジタル処理されている。写真記録として添付の予定。

以上

(雲南懇話会、前田栄三 作成)